

大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達、 自己愛的脆弱性との関連

畠 充諭

(伊原千晶ゼミ)

問題と目的

大学生の無気力

ウォルターズ (Walters, 1961) は、学業への意欲を失い、焦りや不安よりも無気力、無関心、怠惰などの印象を与える一群の学生があることを指摘し、彼らが示す情緒的引きこもり、競争心の欠如、社会的参加の欠如、社会的参加の停止、空虚感などが神経症的抑うつ反応とも精神病質とも異なるとして、アパシーという新たな診断カテゴリーを提唱した。また、彼はアパシーを青年期後期の青年が、男性的同一性の形成途上において、予測される屈辱や敗北に対し、防衛している状態と考えた。

アパシーという言葉は、一般的には意欲に乏しく無感動な状態や無関心な状態を指し、従来では、統合失調症 (schizophrenia) の行動特徴の記載にしばしば用いられる。しかし、現代では、青年期にみられる特有の無気力状態を指すことが多い。日本では大学生のアパシーをウォルターズ由来の学生アパシー (student apathy) と呼ぶことが多い。

1970～1980年代、学生アパシーは学業からの退却を特徴としていた。アパシーに関する診断的な考察に努力を注いだ笠原 (1988) は、アパシーの状態であり大学生活を送ることが困難である若者達の問題を総括して退却神経症と呼ぶことを提唱し、その主症状は無気力、無関心、無快楽 (アンヘドニア) であるとした。また、その背景に高学歴社会の到来、青年期の延長、一人前という自覚のモチにくさなど、現代社会特有の心的な環境があるとした。山田 (1990) は、家族論的な視点からアパシーの検討を重ね、多くの事例についての臨床観察から、アパシーの基本病理を

男性性や社会性からもたらされる自己不確実感とし、両親と本人との力動的な関係が父性拒否、男性性の歪みに結びつくとした。

しかし1990年以降、学生アパシーは臨床的・精神疾患の見当たらない一般の学生にも見られるようになり、その傾向の広域化と軽度化により、そのような傾向を持ちながら学校生活を送っている学生が増加していると言われている (山田, 2006)。例えば山田 (1990) は、アパシーを軽症と重症とに分けている。軽症は、学業からのみの撤退で、学業以外のアルバイトやサークル等には参加ができていない状態で、その中で自分らしさを探し、現実復帰の可能性があった。重症の場合では、学生生活全般からの撤退をし、人間関係から引きこもり、葛藤を感じなくてすむ昔の友人としか会わない、社会の出来事を無視する。それを「不安という風の来ないくぼみに時間よ止まれと念じてしゃがみ込む」状況であるととらえた。

上述したように、1990年以前では大学生における神経症的意欲低下が目立ってきた。それは学生アパシーと呼ばれ、大学生活において主要な領域である学業からの選択的な退却を特徴とした。しかし、1990年以降は社会的場面からの全面撤退を特徴とする「社会的ひきこもり」の出現が目立ちはじめた。社会的ひきこもりの状態は学生アパシーと共通するところが多いが、学生アパシーの特徴は主要な社会的場面からの部分的撤退なので両者は質的に異なることとなる。また、近年の大学生は学業からのみ撤退し、副業だけに熱心になる学生は少なくなつたと言われている。以上のように、近年の無気力の様相は以前とは異なってきている。そこで本研究では、一般的な大学生の社会的場面からの

撤退という側面に焦点を当てて検討をしていく。また、スチューデントアパシーと区別するために、健全な大学生に見られる社会的場面に対する撤退を、下山（1995）に従い「意欲低下傾向」とする。

スチューデントアパシーとアイデンティティ発達に関する研究

スチューデントアパシーとアイデンティティ発達との関連を質問紙調査により実証的に扱った研究として、一般学生を対象とした鉄島（1993）と下山（1995）があげられる。鉄島はアパシー傾向を「授業からの退却」「学業からの退却」「学生生活からの退却」の3因子に分け、授業からの退却にはアイデンティティの未確立と進学動機の曖昧さが影響を及ぼしており、学生生活退却には主にアイデンティティの未確立が、学業からの退却には主に進学動機曖昧さが影響を及ぼしているとした。しかし、鉄島の研究では一般学生のアパシー傾向を人格障害的アパシーの連続線上で論じているという問題点があった。

下山は、大学生に見られる人格障害レベルの意欲低下を「スチューデントアパシー」として、それとは区別するために、健全な大学生に見られる社会場面に対する意欲低下を「意欲低下傾向」として、アパシー心理性格尺度、意欲低下領域尺度を作成し、下山（1992）が作成したモラトリアム尺度とアイデンティティ尺度を加え、大学1年生の男子を対象に質問紙調査を実施した。意欲低下領域尺度の下位尺度は、授業に出席する意欲を失う「授業意欲低下」、学業の内容や勉学に意欲を失う「学業意欲低下」、居場所や意義がなくて学校生活そのものに意欲を失う「大学意欲低下」から構成される。その結果から、授業に対する意欲低下はアイデンティティの未確立の問題というより、快追求・課題回避的な性格に由来する行動上の問題と推測され、学業に対する意欲低下は青年期の発達課題であるアイデンティティの未確立が問題であるとした。また、大学意欲低下の高い学生はスチューデントアパシーの中核的心理障害とされている、生活の味気のなさ、実感のなさを感じており、乳児期に由来するアイデンティティの基本的感覚が低いことが明らかになった。

下山の研究結果から、子どもが成長し生き方を

自分で選択し成熟した人間になっていく中で、大きな節目である青年期に当たる大学生はアイデンティティを確立していく段階にあるが、社会的ひきこもりのような状態に見られる社会的場面からの撤退を理解するためには、青年期心性のみを問題とするのではなく、それに加えてアイデンティティ発達の基礎の問題も検討するべきであるということが考えられる。しかし、下山（1992）のアイデンティティ尺度の下位尺度である「アイデンティティの基礎」は項目数が10項目と少ないため、複雑なアイデンティティ発達を把握するには不十分であった。したがって本研究では、より精密にアイデンティティのどの発達段階に問題があるかを検討していく。

自己愛的脆弱性とスチューデントアパシーとの関連

青年期にあたる大学生は、身体的、心理的、社会的な変化が急速な時期であり、家族と物理的に分離することが多くなる。家族と同居している場合でも生活のサイクルが異なってくることが多いことから、物理的にも情緒的にも家族と分離していくことが必要になる。そのような時期である青年期は自己愛が高まるといわれている。例えば中島（1998）は青年期の発達過程を通じて、住み慣れた拠り所である家族から離れていくが、こうした独り立ちの際には、自分というものを強く意識し、その存在を周りに認めてもらおうとする気持ちが高まり、自己愛的な状態が生じやすくなるとしている。このように青年期はその発達過程において、最も自己愛的な状態に陥りやすい時期であると指摘されている。

発達過程として青年期が自己愛的であるという議論の一方で、現代の青年が自己愛的になってきているという指摘もされている。そのような議論は、日本の文化的問題や、青年期における対人関係のあり方と関連づけて論じられることが多い。

このように日本において、現代の青年は以前の青年期に比べて自己愛的になってきているという指摘が数多くされている。自己愛的な人格傾向を示す傾向がある現代青年は、自尊心の脆弱性のために、批判や挫折による傷つきに対して非常に敏感になる。また、脆弱な自己愛を保護するために、

対人関係や社会的な活動を回避するという精神活動がみられる。それは、葛藤場面を回避しアイデンティティの確立が積極的課題となりにくいスチューデントアパシーと共通している。以上のように、現代の青年は以前よりも自己愛人格傾向を示す者が増えてきている。また、スチューデントアパシーを規定するものの一要因として自己愛の障害が位置づけられ、両者の関連が考えられる。

スチューデントアパシーと自己愛人格の関連を調査したのものとして、丸山（1994,1996）の研究がある。丸山（1994）は自己愛の表出を自己および、他者にも向けられるとし、関わりの対象を自己、他者とし、また、自己愛の質を自己にとってpositive, negativeなものとして構造化した。結果から、強いアパシー傾向が、自尊感情や愛他性といったpositiveな自己愛の欠落と関係することがわかった。それは、自己が自己愛をpositiveに受け入れることがアパシーとの対峙や回避につながることを示唆している。また、この研究ではnegativeな自己愛の質として誇大感と理想化の二因子から検討しているが自己愛のnegativeな側面についての言及はされていない。しかし、続く丸山（1996）の研究では、現代の青年の自己愛は、誇大感や理想化という未熟な表出形態をとることが示唆された。

従来の自己愛の研究では、丸山の研究のように、自己愛のnegativeな質として誇大感と理想化といった側面に重点がおかれてきた。しかし、日本では目的感の希薄さや対人関係の過敏さや恥の回避といった自己愛の脆弱性や過敏性に近い事例が多いといわれている。また、鏞（2003）は日本でよく問題とされる対人恐怖、不登校、アパシーなどについて脆弱性・過敏性と関連する報告をしている。そこから、自己愛の質として、誇大性や理想化だけでなく脆弱性・過敏性といった側面を検討することが有意義であると考えられる。また、周囲を過剰に気にかける過敏型の人々が示す自己愛的な特徴は、スチューデントアパシーにみられる回避行動を説明しうる部分が多く思われる。そこで本研究では自己愛の脆弱性・過敏性に焦点を当てて、それがどのように意欲低下傾向と関連しているかを検討していく。

自己愛の脆弱性や過敏性に重点をおいて自己愛

を測定するために、他人からの承認・賞賛、潜在的特権意識とそれによる傷つき、恥傾向と自己顯示の抑制、自己緩和能力の不全、目的感の希薄さといった、5つの指標から自己愛を測定する「自己愛的脆弱性尺度」を使用する。自己愛的脆弱性とは、「自己の価値や存在意義と関連した不安や傷つきを処理し、肯定的自己評価や心理的安定を維持する能力の脆弱性」である（上地・宮下、2005）。

アイデンティティ発達と自己愛的脆弱性との関連について

佐方（1988）は、同一性拡散の心理的特徴に関する研究において、アイデンティティ感覚（自意識過剰）と自己愛傾向との関連を調査し、アイデンティティ拡散感をもつ学生ほど誇大化傾向が有意に高いことを見いだしている。アイデンティティ感覚とはエリクソン（Erickson, 1959）が青年期におけるアイデンティティ拡散の一種として取り上げた状態像である。その背景には漸成発達の第Ⅱ段階、「自律性対恥、疑惑」の問題が密接に関係しているとされる。

思春期や青年期のアイデンティティ危機は、急激な身体・性的成長と社会的な関係の拡大によって、それまで頼りにされてきた諸段階の成果が再度問題となる時期とされる。とくに恥と疑惑の感覚について、エリクソン（1959）は「アイデンティティ感覚すなわち自意識過剰は、しつけをする大人の信頼と子ども自身の信頼にかかわる疑惑の新版になる」と表現している。つまり、アイデンティティ感覚は、第Ⅱ段階における恥と疑惑の感覚が、青年期のアイデンティティ危機の段階にいたって再度問題となった状態に相当する。

以上のように誇大感の傾向とアイデンティティ発達については研究がなされているが、自己愛の脆弱性側面についての研究はこれまでにされていない。そこで本研究では、早期のアイデンティティ発達と自己愛的脆弱性との関連を検討していく。

本研究では、意欲低下傾向をもつ大学生の背景にある心理的問題を把握するために、大学生の意欲低下をアイデンティティ発達、自己愛的脆弱性との関連から検討していくことを目的とする。

方 法

調査対象 K大学に所属している大学生を対象として質問紙調査を実施した。

手続き フェースシートと上記の3尺度を冊子として、講義時間に配布して集団的に実施した。回答所要時間は10～15分であった。調査期間は2008年10月28日～11月14日であった。

質問紙

1. 意欲低下領域尺度 下山 (1995)

学業意欲低下尺度5項目、授業意欲低下尺度5項目、大学意欲低下尺度5項目の下位尺度から構成される。回答は5件法で求め、意欲低下傾向が高いほど高得点となるように、各項目への回答に対して1～5点を、「あてはまらない(1点)～あてはまる(5点)」のように得点を与えた。ただし、逆転項目の場合は評定点を逆転するので、「あてはまる(1点)～あてはまらない(5点)」とした。

2. ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版 (REIS; Rasumussen's Ego Identity Scale; 以下REIS) 宮下 (1987)

エリクソンの発達漸成理論図式における、最初の6段階の心理・社会的危機をどの程度解決しているかによって同一性の程度を測定しようとする。

6段階の危機とは以下の通りである。I; 乳児期—基本的信頼感対不信任感, II; 幼児期前期—自律性対恥, 疑惑, III; 幼児期後期—自主性対罪悪感, IV; 学童期—勤勉性対劣等感, V; 青年期—同一性対同一性拡散, VI; 成人前期—親密性対孤立。本研究では6段階の危機の中で第I, II, III段階の33項目を使用した。回答は7件法で求め、各項目への回答に対して1～7点を、「全くそう思わない(1点)～非常にそう思う(7点)」のように得点を与えた。ただし、逆転項目の場合は評定点を逆転するので、「あてはまる(1点)～あてはまらない(7点)」とした。

3. 自己愛的脆弱性尺度 上地・宮下 (2005)

目的感の希薄さ9項目、承認・賞賛への過敏さ11項目、自己顕示抑制8項目、自己緩和不全6項目、潜在的特権意識6項目の下位尺度から構成さ

れている。その中で自己愛の過敏性・脆弱性を測定している、自己顕示抑制、自己緩和不全の2つの下位尺度を使用した。目的感の希薄さも自己愛の過敏性・脆弱性を測定しているが、他の尺度と重複しているため、本研究では使用しなかった。回答は5件法で求め、自己愛的脆弱性が高いほど高得点となるように、各項目への回答に対して1～5点を、「あてはまらない(1点)～あてはまる(5点)」のように得点を与えた。ただし、逆転項目の場合は評定点を逆転するので、「あてはまる(1点)～あてはまらない(5点)」とした。

結 果

調査対象者の合計は142名であった。そのうち無効回答、欠損回答を除いた124名を有効回答として採用した(平均年齢20.48歳, 標準偏差0.95歳, 有効回答率87.32%)。有効回答124名のうち男性は67名(平均年齢20.55歳, 標準偏差0.85歳), 女性は57名(平均年齢20.39歳, 標準偏差1.05歳)であった。

各尺度に関する信頼性分析

各尺度の全ての項目ごとに信頼性分析を行った。その結果、意欲低下領域尺度の α 係数は0.762, 自己愛的脆弱性尺度は0.795, REISは0.802であり、どの尺度もある程度の内部一貫性があることが確認された。

意欲低下傾向とアイデンティティ発達、自己愛的脆弱性について

大学生の無気力やアイデンティティ発達には男女差があることが指摘されていることから、本研究では男女別に検討を行った。

1. 意欲低下領域尺度

意欲低下領域尺度の総得点と下位尺度の平均値, 標準偏差, t 検定の結果を表1に示した。 t 検定の結果、意欲低下領域尺度における男女差はみられなかった。これはスチューデントアパシーが男子学生特有の現象であるとしてきたこと(笠原, 1988)とは符合しない結果となった。本研究では一般的な意欲低下傾向が男性のみに限られるのではなく、顕著な男女差がないという結果になった。

表1 意欲低下領域尺度における男女差

	男性			女性			t値
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
合計	67	41.96	10.02	57	39.84	8.60	1.294
授業	67	15.03	4.46	57	13.81	3.87	1.616
学業	67	14.7	5.19	57	13.33	4.31	1.58
大学	67	12.22	4.40	57	12.7	4.28	-0.61

2. REIS

REISの下位尺度の平均値、標準偏差、t検定の結果を表2に示した。その結果、第Ⅱ段階（自律性対恥、疑惑）で有意に男性の方がREISの得点が高かった。しかし、第Ⅰ段階（信頼感対不信感）、第Ⅲ段階（自主性対罪悪感）では男女に有意な差は見られなかった。

表2 REISにおける男女差

	男性			女性			t値
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
信頼感対不信感	67	41.24	10.41	57	41.88	7.53	-0.385
自律性対恥、疑惑	67	46.73	9.73	57	41.18	9.86	3.149*
自主性対罪悪感	67	49.75	8.73	57	49.00	9.65	0.452

*p<.05

3. 自己愛的脆弱性尺度

自己愛的脆弱性尺度の総得点と下位尺度の平均値、標準偏差、t検定の結果を表3に示した。その結果、自己顕示抑制、自己緩和不全ともに男性の方が低かった。このことから、本研究では女子学生の方が、注目を浴びたり自己を顕示したりする場面で強い恥意識が生じるため、自己顕示を抑制し、強い不安や情動などを自分で調整・緩和する力が弱く、他者に調整・緩和してもらおうとする傾向が強いという結果になった。

表3 自己愛敵脆弱性尺度における男女差

	男性			女性			t値
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
自己顕示抑制	67	23.82	7.30	57	27.44	6.60	-2.873*
自己緩和不全	67	17.07	5.75	57	19.11	5.00	-2.082**

*p<.05 **p<.01

意欲低下傾向とアイデンティティ発達、自己愛的脆弱性の関連

1. 意欲低下領域尺度とREISとの関連

意欲低下傾向と早期のアイデンティティ発達の関連性を検討するために、意欲低下領域尺度とREISの下位尺度ごとの合計得点を算出し、男女別に相関分析を行った。まず意欲低下領域尺度とREISの下位尺度の相関分析の結果を表4に示し

た。

相関分析の結果、男性では学業意欲低下尺度と第Ⅱ段階の間に有意な負の相関が見られた ($r = -.268$, $p < .05$)。また、授業意欲低下尺度と第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ段階の間に負の相関が見られた ($r = -.311$, $p < .05$; $r = -.318$, $p < .01$; $r = -.299$, $p < .05$)。大学意欲低下尺度でも、第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ段階の間で有意な負の相関が見られた ($r = -.471$, $p < .01$; $r = -.350$, $p < .01$; $r = -.377$, $p < .01$)。

女性の結果では、学業意欲低下尺度と第Ⅱ、Ⅲ段階で有意な負の相関が見られた ($r = -.319$, $p < .05$; $r = -.277$, $p < .05$)。授業意欲低下尺度ではREISの間には有意な相関が見られなかったが、大学意欲低下尺度と第Ⅰ、Ⅲ段階で有意な負の相関が見られた ($r = -.283$, $p < .05$; $r = -.533$, $p < .01$)。

表4 意欲低下領域尺度とREISの下位尺度ごとの相関

	男性			女性		
	学業	授業	大学	学業	授業	大学
信頼感対不信感	-.144	-.311*	-.471**	-.243	-.035	-.283*
自律性対恥、疑惑	-.268*	-.318**	-.350**	-.319*	-.087	-.132
自主性対罪悪感	-.059	-.299*	-.377**	-.277*	-.156	-.533**

*p<.05 **p<.01

次に意欲低下傾向とアイデンティティ発達の関連性を検討するためにREISの下位尺度を説明変数、意欲低下領域尺度の各下位尺度を被説明変数とした重回帰分析を行い、結果を表5に示した。

重回帰分析の男性の結果から、学業意欲低下尺度では重相関係数は有意でなく、また標準偏回帰係数も有意な結果は見られなかった。しかし、第Ⅱ段階では有意な傾向が見られた ($\beta = -.270$, $p < .10$)。授業意欲低下尺度では、重相関係数は $R = .108$, $p < .05$ と有意であったが、標準偏回帰係数は有意な結果は見られなかった。大学意欲低下では、重相関係数は $R = .218$, $p < .001$ と有意であり、第Ⅰ段階の標準偏回帰係数のみ有意であった ($\beta = -.324$, $p < .05$)。

女性の結果から、学業意欲低下尺度では重相関係数は $R = .108$, $p < .05$ と有意であり、第Ⅱ段階の標準偏回帰係数のみ有意であった ($\beta = -.288$, $p < .05$)。授業意欲低下尺度では、重相関係数、標準偏回帰係数ともに有意な値を示さなかった。大学意欲低下尺度では、重相関係数は $R = .255$,

$p < .001$ と有意であり, 第Ⅲ段階の標準偏回帰係数のみ有意であった ($\beta = -.514, p < .001$)。

表5 意欲低下領域尺度とREISの下位尺度の重回帰分析

	男性			女性		
	学業	授業	大学	学業	授業	大学
信頼感対不信感	-.061	-.133	-.324*	-.076	.159	-.031
自律性対恥, 疑惑	-.270	-.198	-.142	-.288*	-.110	-.095
自主性対罪悪感	.081	-.146	-.137	-.225	-.221	-.514***
重相関係数	.032	.108*	.218***	.126*	-.004	.255***

* $p < .05$ *** $p < .001$

本研究の結果から, 男女とも学業に対する意欲低下は第Ⅱ段階から影響を受けていることが示唆された。また, 授業意欲低下に対して男性は, 第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ段階から影響を受けていて, 女性の場合では, 早期のアイデンティティ発達とは関連していないと考えられた。

下山 (1995) は大学意欲低下に関して, 乳幼児期に由来する深刻な発達的な問題との関連性を指摘している。本研究でも大学に対しての意欲低下は, 男女とも早期のアイデンティティ発達からの影響を受けていることが考えられ, 男性は特に第Ⅰ段階から, 女性の場合では特に第Ⅲ段階からの影響が強いという結果になった。

2. 意欲低下領域尺度と自己愛的脆弱性尺度との関連

意欲低下傾向と自己愛的脆弱性の関連性を検討するために, 意欲低下領域尺度と自己愛的脆弱性尺度の下位尺度ごとの合計得点を算出し, 男女別に相関分析を行った。まず意欲低下領域尺度と自己愛的脆弱性尺度の相関分析の結果を表6に示した。

相関分析の男性の結果から, 授業意欲低下尺度と自己顕示抑制尺度の間のみ有意な正の相関が見られた ($r = .375, p < .01$)。女性では, 授業意欲低下尺度と自己緩和不全尺度の間のみ有意な正の相関が見られた ($r = .424, p < .01$)。

表6 意欲低下領域尺度と自己愛的脆弱性尺度の下位尺度ごとの相関

	男性			女性		
	学業	授業	大学	学業	授業	大学
自己顕示抑制	.141	.375**	.190	.152	.083	.131
自己緩和不全	.202	.234	-.029	.228	.424**	.061

** $p < .01$

次に意欲低下傾向と自己愛的脆弱性の関連性を検討するために自己愛的脆弱性尺度の下位尺度を説明変数, 意欲低下領域尺度の各下位尺度を被説明変数とした重回帰分析を行い, 結果を表7に示した。

重回帰分析の男性の結果から, 学業意欲低下尺度では重相関係数, 標準偏回帰係数ともに有意な結果が得られなかった。授業意欲低下尺度では, 重相関係数は $R = .129, p < .01$ と有意であり, 自己顕示抑制尺度の標準偏回帰係数は有意であった ($\beta = .324, p < .01$)。大学意欲低下では, 重相関係数, 標準偏回帰係数ともに有意な結果が得られなかった。

女性の結果から, 学業意欲低下尺度では重相関係数, 標準偏回帰係数ともに有意な結果が得られなかった。授業意欲低下尺度では, 重相関係数は $R = .158, p < .01$ と有意であり, 自己緩和不全尺度の標準偏回帰係数は有意であった ($\beta = .426, p < .01$)。大学意欲低下尺度では, 重相関係数, 標準偏回帰係数ともに有意な結果が得られなかった。

表7 意欲低下領域尺度と自己愛的脆弱性の下位尺度の重回帰分析

	男性			女性		
	学業	授業	大学	学業	授業	大学
自己顕示抑制	.085	.334**	.222	.156	.090	.132
自己緩和不全	.175	.127	-.100	.23	.426**	.063
重相関係数	.018	.129**	.015	.042	.158**	-.015

** $p < .01$

本研究の結果から, 男女ともに授業に対する意欲低下と自己愛的脆弱性が密接に関連していることが示唆された。特に男性は授業意欲低下と自己顕示抑制, 女性の場合は自己緩和不全が関連しているという結果になった。

3. REISと自己愛的脆弱性尺度との関連

アイデンティティ発達と自己愛的脆弱性の関連性を検討するために, REISと自己愛的脆弱性尺度の下位尺度ごとの合計得点を算出し, 男女別に相関分析を行った。まずREISと自己愛的脆弱性尺度の相関分析の結果を表8に示した。

相関分析の結果, 男性では第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ段階と自己顕示抑制尺度の間に有意な負の相関が見られた ($r = -.376, p < .01; r = -.391, p < .01; r = -$

.362, $p < .01$)。また、第Ⅱ段階と自己緩和不全との間に負の相関が見られた ($r = -.397$, $p < .01$)。

女性の結果から第Ⅱ段階と自己顕示抑制、自己緩和不全の間で有意な負の相関が見られた ($r = -.305$, $p < .05$; $r = -.287$, $p < .05$)。

本研究では自己愛の誇大性・自己顕示性という側面ではなく、過敏性・脆弱性という側面に焦点を当てた検討を行った。その結果、男女とも漸成発達の第Ⅱ段階と自己愛の脆弱の側面が密接に関連しているということが示唆された。

表8 REISと自己愛的脆弱性尺度の下位尺度ごとの相関

	男性		女性	
	自己顕示抑制	自己緩和不全	自己顕示抑制	自己緩和不全
信頼感対不信感	-.376**	-.101	.214	-.022
自律性対恥、疑惑	-.391**	-.397**	-.305*	-.287*
自主性対罪悪感	-.362**	-.025	-.140	-.053

* $p < .05$ ** $p < .01$

考 察

本研究では下山 (1995) の作成した意欲低下領域尺度を使用して、質問紙調査を実施した。その結果平均値は授業意欲低下領域尺度15.03, 学業意欲低下領域尺度14.7, 大学意欲低下領域尺度12.22, 尺度全体41.96であった。それは、下山の研究結果 (授業意欲低下領域尺度10.77, 学業意欲低下領域尺度13.42, 大学意欲低下領域尺度10.85, 尺度全体35.04) と比較して、授業、学業、大学全ての領域において平均値が高くなっているという結果になった。本研究の結果から、現代の学生の意欲低下傾向が高くなってきていることが示唆された。そのことから、時代によって変容する無気力傾向を捉えるため、時代に即した無気力感の測定方法を検討していくことが必要だと思われる。

これまでの研究でウォルターズ (1961) や笠原 (1988) は、スチューデントアパシーが男子学生特有の現象であるとしてきた。しかし、本研究では意欲低下傾向に顕著な男女差は見られなかった。スチューデントアパシーと意欲低下傾向は同一次元上の状態ではないが、意欲低下傾向に顕著な男女差が見られなかったことは、以前と状態が変化してきていることを示唆している。

アイデンティティ発達について、本研究では第Ⅱ段階 (自律性対恥、疑惑) で有意に男性の方がREISの得点が高かった。しかし、第Ⅰ段階 (信

頼感対不信感)、第Ⅲ段階 (自主性対罪悪感) では男女に有意な差は見られなかった。宗田・岡本 (2005) や岡本 (2002) などの研究結果から、アイデンティティ発達において「個」の発達が男性に有意に見られることが示唆されている。このことから、第Ⅱ段階 (c.g. 「自分の人生なのだから大事なことは人に頼らないで、自分で決断を下していると思う。」) は個としてのアイデンティティを中心とした質問項目であるため男性の方が高得点であったと解釈できる。

岡本 (2002) などの研究結果からアイデンティティ発達において女性は「個」としてのアイデンティティと他者との「関係性」を通じて獲得するアイデンティティの双方が並行して発達していくとされている。そのことから、第Ⅰ, Ⅲ段階は他者との関連性を含む項目を含んでいるが、本研究では男女に有意な差は見られず、アイデンティティ発達において女性は他者との関係性という側面が優勢であるといった知見は支持されなかった。アイデンティティ発達における男女差の研究は数が少ないので、実証的な研究の積み重ねやアイデンティティ発達における個としての発達や関係性発達の両側面を捉える論点や手法が必要である。

自己愛的脆弱性については、自己顕示抑制、自己緩和不全ともに男性の方が低かった。このことから、本研究では女子学生の方が、注目を浴びたり自己を顕示したりする場面で強い恥意識が生じるため、自己顕示を抑制し、強い不安や情動などを自分で調整・緩和する力が弱く、他者に調整・緩和してもらおうとする傾向が強いという結果になった。この差が男女のどのような差異を反映しているか更に詳しい検討が必要である。

意欲低下傾向とアイデンティティ発達において、学業に対する男性の意欲低下は、第Ⅱ段階と有意な負の相関が見られるものの、アイデンティティ発達とはほぼ関連していないという結果になった。女性の場合では第Ⅱ, Ⅲ段階からの影響を受けているという結果になった。授業意欲低下に対して男性は、第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ段階から影響を受けていて、女性の場合では、早期のアイデンティティ発達とは関連していないという結果になった。大学に対しての意欲低下は、男女とも早期のアイデンティティ発達からの影響を受けていることが考えられ

た。しかし、女性の場合では第Ⅱ段階からの影響が低いという結果となった。

下山(1995)の研究結果では、①「学業意欲低下」は青年期に成し遂げておくべき社会的なアイデンティティ確立の問題と直面している状態である、②「授業意欲低下」はアイデンティティ発達によって説明されない、③「大学意欲低下」は、基本的信頼感や自律性の欠如といった乳幼児に由来する深刻な発達的問題であるとした。

本研究では、学業意欲低下に関して男性の場合には下山の研究結果を支持する結果が得られた。このことから、男性の学業に関する意欲低下は発達の問題とは考えにくく、特に学業そのものに勤勉に打ち込めるかどうかという問題である可能性が考えられる。しかし、女性の場合では、学業に関する意欲低下は発達的な問題を孕んでいるという可能性が示唆された。

授業意欲低下に関して、本研究では男性の場合、下山の結果は一致せず第Ⅴ段階のアイデンティティ確立の問題だけではなく、授業に対する意欲低下は発達的な問題と関連していると考えられた。女性の場合では発達の問題との関連は見られず、ルーズな生活態度によって生じた行動上の問題であることが推測される。

学業と授業に対する意欲低下は男性と女性に同様に起こっていることが表1より示されている。したがって、同様に意欲低下を起こしたとしても、男性と女性ではその意味が異なることが考えられる。

大学意欲低下に関して、本研究では下山の研究結果を支持するような結果が得られた。したがって、本研究の結果からも大学に関する意欲低下は、男女とも乳幼児に由来する深刻な発達の問題と関連しているという可能性が示唆された。女性の場合に第Ⅱ段階からの影響が低いということは、大学に対する意欲低下が自律性とは異なる部分に向けられていることが示唆された。

意欲低下傾向と自己愛的脆弱性との関連について、学業と大学に関しての意欲低下は自己愛的脆弱性とは関連していないということが示唆された。しかし、男女ともに授業に対する意欲低下と自己愛的脆弱性が密接に関連していることが示唆された。自己愛が脆弱であれば、授業のように自分が

評価されるような傷つきやすい状況を回避しようとし、ひきこもりのような無気力状態を呈する可能性が考えられる。特に男性は授業意欲低下と自己顕示抑制、女性の場合は自己緩和不全が関連しているという結果になった。そのことから、男性の場合、授業という自己を顕示する場面で自己顕示を抑制するため、意欲低下に繋がると考えられる。女性の場合では、不安や情動などを他者に調整・緩和してもらおうという傾向と授業に対する意欲低下が関連していると考えられる。

アイデンティティ発達と自己愛的脆弱性の関連について、男女とも第Ⅱ段階と自己愛的脆弱性が密接に関連し、第Ⅱ段階が未発達な場合、自己愛的脆弱的側面が強くなるということが示唆された。そのことから、第Ⅱ段階が未発達の場合、青年期に恥や疑惑の感覚が再度問題になり、肯定的自己評価や心理的安定を維持する能力が脆弱的になるという可能性が考えられる。エリクソン(1959)は青年期におけるアイデンティティ拡散の一種として取り上げた「自意識過剰」という状態像がある。その背景には第Ⅱ段階の問題が密接に関係しているとされている。自意識過剰とは、人前で自分がどうみられているか気になる、どのようにふるまっ てよいかかわからずに緊張してしまう、自分が仲間 のなかに入っていくとしらげさせているようである、など人の目を必要以上に意識した状態であるといえる(谷, 2004)。そのような状態は、自己愛が脆弱的な人が呈する状態と関係していると考えられる。以上のようなことから、第Ⅱ段階と自己愛的脆弱性の関係が説明されるように思われる。また、男性は早期のアイデンティティ発達全体が未発達の場合、自己顕示を抑制し、強い不安や情動などを自分で調整・緩和する力が弱いという傾向があることが示唆された。

ま と め

本研究では、学業、授業、大学の三領域の意欲低下傾向と早期のアイデンティティ発達、及び自己愛的脆弱性との関連を男女別に検討した。男性の学業意欲低下には、アイデンティティの発達的問題や自己愛的脆弱性は関連しないことが示され、女性の場合では、アイデンティティの発達的問題を孕んでいる可能性が示唆されたものの、自己愛

の脆弱的側面は関連しないということが示された。男性の授業意欲低下には、アイデンティティの発達の問題に加えて自己愛的脆弱性が関連し、女性の場合では、アイデンティティの発達の問題との関連は見られなかったが、自己愛的脆弱性が関連していることが示された。また、授業意欲低下に関連する自己愛的脆弱性の質は男女で異なることが示唆された。大学意欲低下には、男女ともアイデンティティの発達の問題が関連していることが示されたが、自己愛的脆弱性とは関連していないという結果になった。また、大学意欲低下に関連する発達の問題は男女で異なることが示唆された。

以上のような結果から、意欲低下傾向をもつ大学生の背景にある心理的問題は領域ごとで異なることが示された。特に、早期のアイデンティティが未発達の場合には、大学に対しての意欲低下に繋がり、自己愛が脆弱な場合には授業意欲低下に繋がるということが示唆された。そのことから、学業、授業、大学の意欲低下は非連続的で質的に異なる次元上にある現象であることが考えられる。また、アイデンティティ発達の未確立な段階や自己愛的脆弱性の質が意欲低下に与える影響は男女で異なることが示された。男女のこのような差が何を反映しているか、今後更に詳しい検討が必要である。

参考・引用文献

- Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle. New York: W. W. Norton (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 誠信書房)
- 上地雄一郎・宮下一博 2005 コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91
- 笠原嘉・山田和夫 1981 キャンパスの症状群 現代学生の不安と葛藤 弘文堂
- 笠原嘉 1988 退却神経症—無気力・無関心・無快楽の克服 講談社
- 笠原嘉 2002 アパシー・シンドローム 岩波新書
- 小塩真司 2004 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 丸山広人 1994, 1996 アパシーの基底因としての自己愛パーソナリティ
- 宮下一博 1987 Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究 35, 253-258
- 宗田直子・岡本祐子 2005 アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討 青年心理学研究 27-42
- 中島啓之 1998 青年期の逸脱行動と自己愛 現代青年の理解の仕方—発達臨床心理学的視点から— ナカニシヤ出版
- 岡本祐子 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 大芦 治・鎌腹雅彦 2005 無気力な青少年の心 北大路書房
- 佐方哲彦 1988 同一性拡散の心理的特徴の側面 自己愛傾向および共感性との関連 日本心理学会大会第52回発表論文集
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティ発達との関連で— 教育心理学研究, 40, 121-129
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155
- 白石尚大・岡本祐子 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達, 家族機能の関連 青年心理学研究, 17, 1-13
- 谷 冬彦・宮下一博 2004 さまよえる青少年の心 北大路書房
- 鑪幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社
- 鑪幹八郎 2003 心理臨床と精神分析 ナカニシヤ出版
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, 41, 200-208
- Walters, P. A. 1961 Student apathy. In G. B. Blain et al. (Eds.), Emotional problems and student. New York: Applenton-Century-Crofts. (石井完一郎・唄中 達・藤井 虔 (監訳) 1975 学生の情緒的問題 文光堂 106-120)
- 山田和夫 1990 家族関係の中でのスチューデントアパシー 同朋舎 (土川隆史編「スチューデントアパシー」)
- 山田ゆかり 2006 大学新入生における適応感の

検討 名古屋文理大学紀要

大学生の意識調査

調査の説明

この調査は大学生の意識について調査するものです。この冊子は、調査の説明、質問項目（7枚）の全8枚から構成されています。

説明を読んでそれぞれの質問についてお答えください。この調査の結果は、統計的に処理されますので、個人の回答のみを問題にしたり、公表することはありません。

ご協力よろしく申し上げます。

性別（ ）

年齢（ ）

回生（ ）

学部（ ）

調査者 京都学園大学 人間文化学部 人間関係学科
4回生 畠 充諭

次のことがらについて、あなたにどの程度当てはまるか考え、「あてはまらない」から「あてはまる」までのうちから、1つ選んで○印をつけて下さい。

選択肢

1. あてはまらない
 2. ややあてはまらない
 3. どちらともいえない
 4. ややあてはまる
 5. あてはまる
-

- | | |
|---|-----------|
| 1. 「自分のことを話しすぎた」と思って、自己嫌悪におちいることがある。 | 1・2・3・4・5 |
| 2. 「あんなに自分のことを出すのではなかった」と後悔することがある。 | 1・2・3・4・5 |
| 3. 人前で自分のことを話したあとに、話した内容について後悔することがよくある。 | 1・2・3・4・5 |
| 4. 他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで、後味の悪い感じが残ることがある。 | 1・2・3・4・5 |
| 5. ほめられたり良く評価されたりすると、何か落ちつかない気持ちになる。 | 1・2・3・4・5 |
| 6. だれかと話しているときには、自分の話題で時間を取りすぎてはいけないと思って気にしている。 | 1・2・3・4・5 |
| 7. 人前で私にみんなの注目が集まると、恥ずかしいような、いたたまれない気分になる。 | 1・2・3・4・5 |
| 8. ほめられると、素直に喜ぶよりも、「たいしたことではない」と謙遜したい気持ちが強くなる。 | 1・2・3・4・5 |
| 9. 悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる人が身近にいないと、私は生きていけないと思う。 | 1・2・3・4・5 |

 選択肢

1. あてはまらない
 2. ややあてはまらない
 3. どちらともいえない
 4. ややあてはまる
 5. あてはまる
-

- | | |
|--|-----------|
| 10. 精神的に不安定になっているときには、だれかと話しをしないと落ち着くことができない | 1・2・3・4・5 |
| 11. 悩みや心配事があるときには、自分の中にとめておけなくて、すぐだれかに話すほうだ。 | 1・2・3・4・5 |
| 12. 不安を感じているときには、誰かから大丈夫だと言ってもらわないと安心できないほうだ。 | 1・2・3・4・5 |
| 13. ショックなことがあっても、自分で自分を励まして元気を取り戻せる方だ。 | 1・2・3・4・5 |
| 14. つらいことや苦しいことがあるときには、身近な人にそれを理解してほしいと強く期待する。 | 1・2・3・4・5 |
| 15. 教師に言われなくても自分から進んで勉強する。 | 1・2・3・4・5 |
| 16. 勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう。 | 1・2・3・4・5 |
| 17. 勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる。 | 1・2・3・4・5 |
| 18. 必要な単位以外でも、関心のある授業はとるようになっている。 | 1・2・3・4・5 |
| 19. 大学で勉強することで自分の関心を深めている。 | 1・2・3・4・5 |

 選択肢

1. あてはまらない
 2. ややあてはまらない
 3. どちらともいえない
 4. ややあてはまる
 5. あてはまる
-

- | | |
|-----------------------------------|-----------|
| 20. 授業に出る気がしない。 | 1・2・3・4・5 |
| 21. 朝寝坊などで授業に遅れることが多い。 | 1・2・3・4・5 |
| 22. 何となく授業をさぼることがある。 | 1・2・3・4・5 |
| 23. 大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い。 | 1・2・3・4・5 |
| 24. 授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある。 | 1・2・3・4・5 |
| 25. 大学生活で打ち込むものがない。 | 1・2・3・4・5 |
| 26. 大学ではいろいろな人と交流がある。 | 1・2・3・4・5 |
| 27. 大学にいるより、自分ひとりであるほうがいい。 | 1・2・3・4・5 |
| 28. 大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である。 | 1・2・3・4・5 |
| 29. 大学のなかで自分の居場所がないと感じる。 | 1・2・3・4・5 |

大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達、自己愛的脆弱性との関連

次のことがらについて、あなたにどの程度当てはまるか考え、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までのうちから、1つ選んで○印をつけて下さい。

 選択肢

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 全くそう思わない | 5. ややそう思う |
| 2. かなりそう思わない | 6. かなりそう思う |
| 3. ややそう思わない | 7. 非常にそう思う |
| 4. どちらともいえない | |
-

- | | |
|---|---------------|
| 1. 将来の目的やほしいものを手に入れるために、現在の楽しみをあきらめるとしたら、悔いが残るであろう。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 2. 普通、人間はお互いに正直に、かつ誠実にかかわりあっているものだ。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 3. 最終的に職業を決定したら、きつとうまく人生を乗り越えられであろう。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 4. 気をつけないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 5. 一般的に、人間は信頼できるものだ。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 6. 私の人生の最良の時は、これから訪れるであろう。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 7. 本当に信頼のおける人はなかなかいないものだ。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 8. 私は、本当に欲しい物を我慢して待つことができない方だ。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 9. 将来うまくいくかどうか考えると、今まで絶好のチャンスを逃してきたような気がする。 | 1・2・3・4・5・6・7 |

 選択肢

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 全くそう思わない | 5. ややそう思う |
| 2. かなりそう思わない | 6. かなりそう思う |
| 3. ややそう思わない | 7. 非常にそう思う |
| 4. どちらともいえない | |
-

- | | |
|---|---------------|
| 10. 本当の幸せや成功につながるようなチャンスを逃してきたような気がする。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 11. 私は、欲しい物を手に入れるのに時間がかかりすぎるならば、そのものに興味を失ってしまう方だ。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 12. 私は授業などで指されるのではないか心配である。というのは、もし答えられないと他人が私のことをどんな風に思うか気になるので。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 13. いったん決断したことについてくよくよ考えたりしない。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 14. 友人の前で失敗しても、別にくよくよしない。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 15. 私がこれまで下した判断なり決断は、だいたいにおいて正しかった。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 16. 何かしたあとで、それが正しかったかどうか、心配になることが多い。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 17. 私くらいの年になれば、両親が反対しても、自分のことは自分で決断しなければならない。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 18. 自分の人生なのだから大事なことは人に頼らないで、自分で判断を下していると思う。 | 1・2・3・4・5・6・7 |

選択肢

-
- | | |
|--------------|------------|
| 1. 全くそう思わない | 5. ややそう思う |
| 2. かなりそう思わない | 6. かなりそう思う |
| 3. ややそう思わない | 7. 非常にそう思う |
| 4. どちらともいえない | |
-

- | | |
|--|---------------|
| 19. 自分が他の人のようにうまくやれないということ
を人に悟られても、それほど気にはならない。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 20. 大体的場合、自分が決断した以上は、あとで
悔やむことはしない。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 21. 私は、何か重大な決断をしなくてはならない
時には、いつでも家族から援助や助言を受ける。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 22. 人にとやかく言われるぐらいなら、人前では
口をつぐんでいる方がよい。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 23. 何か課題をやる場合には、全体の見通しを
失わないためにも、その場その場のことだけに
縛られないようにやっていく。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 24. 隠しておけるなら、家族や自分の育ちについ
て他人にしゃべりすぎないのが最善である。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 25. 私は、これまで、学校のクラブ活動や生徒会
活動に進んで参加する方ではなかった。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 26. 私はいつもあくせくしているが、どんなに一
生懸命やっても、他の人ほどの成果が上がらない
ように思われる。 | 1・2・3・4・5・6・7 |
| 27. 人と知り合う時、その人があなたの生い立ちや
家族について、あまり知らない方が、親しくなりや
すい。 | 1・2・3・4・5・6・7 |

 選択肢

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 全くそう思わない | 5. ややそう思う |
| 2. かなりそう思わない | 6. かなりそう思う |
| 3. ややそう思わない | 7. 非常にそう思う |
| 4. どちらともいえない | |
-

28. 私は家族に誇りを感じている。 1・2・3・4・5・6・7
29. 現在、いかにたくさんのお仕事に追われているとしても、次にやらなければならないことについて何らかの計画をもっていることはいいことである。 1・2・3・4・5・6・7
30. ここ2～3年の間、私はクラブやグループ活動にはほとんど参加していない。 1・2・3・4・5・6・7
31. 10代の少年少女時代の楽しい出来事の1つは仲間たちと一緒に規則や約束を決め、協同して何かをやることである。 1・2・3・4・5・6・7
32. 10代の時期に、クラブなどの集団活動に参加することのなかった人は、損をしてきている。 1・2・3・4・5・6・7
33. 私はいつもあくせくとして忙しいが、ともすればカラまわりばかりして、うまく前へ進んでいないように思える。 1・2・3・4・5・6・7

以上です。ご協力ありがとうございました。